

昭和32年3月10日

講演要旨

389—41

起り、他術式では臨牀上何ら異常所見を認めない。

結 論

Oxygenation の観点よりのみ各術式の児への影響を結論するならば Cyclopropane は明らかに他法に比べて劣り、一般に吸入麻酔と比較し局所麻酔應用の無痛分娩法が優位に位する。なお陰部神経麻酔單獨と Nembutal 併用群の比較で有意差を認めぬことから、若干の前處置として投ぜられる Barbitol 剤は児に悪影響を及ぼさぬものと判断される。

56. 硬膜外麻酔の分娩及び婦人科開腹手術への應用

(大阪市大) *藤森速水, 平井 修, 西村禎三,
木下 博, 水野 昭

われわれは Ikle 氏注射筒及び恩地氏などの考案せる注射器を使用し胸腰椎の椎弓間より硬膜外腔へ麻酔薬を注入して、分娩、帝王切開、その他婦人科領域の開腹手術時における硬膜外麻酔法の効果とその副作用並びに實施上の注意を検討した。穿刺部位は分娩には $L_1 \sim L_2$ または $L_2 \sim L_3$ で、帝王切開その他開腹手術には $Th_{12} \sim L_1$ また $L_1 \sim L_2$ とし、使用薬液は Xylocain あるいは Reostesin N, あるいは Procain-HCl, あるいは light percamine solution であった。経産分娩時麻酔には主として硬膜外麻酔のみを行い、一部ポリエチレン管による持続硬膜下麻酔や陰部神経麻酔を施行した。

帝王切開や婦人科の開腹手術には硬膜外麻酔單獨、あるいは本法とカクテル前麻酔との併用法を施行した。硬膜外麻酔の速効性と麻酔持続時間を延長せしめるために各種濃度、薬液 pH 及び末梢血管收縮剤、及びヒアルロニダーゼなどを併用して、これら薬剤の併用効果をも検討した。循環機能については血圧、脈搏測定のほか全交流直記式心電計を使用し麻酔施行前後及び手術中の變動を観察した。

呼吸機能の測定にはフクダ無水式呼吸計を使用し分時呼吸量、並びに呼吸の振巾より呼吸状態をつぶさに検討した。さらに麻酔部位と非麻酔部位の体温變動を測定するために Thermometer を使用した。

硬膜外腔注入薬液の硬膜より蜘蛛膜下腔への滲透による移行についてメチルオレンジ法により注入後の脳脊髄液について検討した。

現在迄の臨牀成績はつぎの通りである。

1) 分娩時使用した症例は58例で満足すべき効果をえたもの53例で失敗例は5例である。この失敗例は實驗初期注入技術の未熟と一部持続麻酔時のポリエチレン管脱

落によるものである。臨牀例は初産婦、経産婦、大多數頭位で臀位2例をさらに高年初産婦2例、中毒症2例、心臓瓣膜症1例を含む。麻酔時合併症として分娩第1期遷延2例、第2期遷延2例で呼吸開始遅延が2例あり分娩中胎児死亡は1例あつたがこれは巨大児にて骨盤と児頭不均衡による分娩遷延を惹起し死亡したものと考えられる。初産婦の多數例に側切開を加えた。

帝王切開手術は15例で著効は11例、有効4例で循環呼吸系における變化殆んどなく、胎児に對する影響ない點より他の麻酔法より優れていると考えられる。婦人科的手術78例で著効57例、有効17例、無効4例である。とくに硬膜外麻酔法は poor risk にあると考えられる子宮外妊娠、その他 shock 準備状態にある患者にも用いる意味において優れた麻酔法と考えられる。副作用として呼吸停止、痙攣などを1例も経験しなかつた。

57. 強化麻酔下における腰麻の検討

(小樽市立) *佐川秀逸, 古川義郎, 福島 稜

腰麻に伴うショックは可成りの頻度に發現しわれわれの最も警戒せねばならぬ副作用でありその豫防對策にはこれまで種々の努力が拂われて來たが Chlorpromazine にショック防止作用、麻酔増強作用など多彩な薬理作用のある點を利用し腰麻剤の使用量を節減してその副作用を著しく軽減せしめんと試み略々満足すべき成績をえたので報告する。30年10月～31年12月の15カ月間當婦人科手術患者 171名を對象とし、Wintermin 50, Pyrethiazine 50, Opystan 105mg のカクテルを腎筋内注射、または点滴投與し、138例は術1～2時間前(A群)に、33例は腰麻後(B群)に投與を受けた。腰麻剤としては全例 Percamin L を使用した。手術術式は表1の如し(圖表省略)。

鎮靜効果：カクテルを投與し術直前の鎮靜効果は、熟眠し全く應答なきもの(卅)5例(3.6%)、就眠しているが強く呼べば不明瞭な應答あるもの(卅)20(14.5%)、就眠していないが應答不明瞭なもの(十)46(33.3%)、睡氣を訴えぼんやりしているもの(十)53(38.4%)、全く正常(一)14(10.1%)である。鎮靜効果と年齢との相関係数 $\gamma = 0.3407$ (有意)で年齢の大なる者程効果大である。カクテル投與1時間後と2時間後では鎮靜効果に有意の差はなかつた。鎮靜効果と麻酔効果との相関係数は腹式87例で $\gamma = 0.3799$ 、腔式51例で $\gamma = 0.3048$ (何れも有意)で鎮靜効果大なる者程麻酔効果は良好である。

麻酔効果：(卅)(卅)(十)の判定は鎮靜効果に準